vol.506

mj "高品質、低価格、情報はマック"
THE MAC JOURNAL
三菱商事アグリサービス株式会社

◆ 2017年9月13日発行ラインナップ
・全肥商連社員総会開催
・再び注目される養蚕

全肥商連社員総会開催

去る9月12日、東京ガーデンパレスにおいて一般社団法人全国肥料商連合会の第7回定時社員総会が開催され、全国より各県の部会員、元売会員、賛助会員、国会議員、経産省・農水省関係者、団体、報道含め総勢207名が参集し盛大に行われた。社員総会では議案事項が滞りなく進められ、全国複合肥料工業会との合同開催での特別講演会では、大手商社で重役を務められ、海外での肥料事業を肌で経験された2名が演者となり、奥村商事株式会社の奥村社長が司会進行を務められ演者の体験談を拝聴した。講演内容を掻い摘んでご紹介したい。

中国の農業及び肥料事情の現状と展望

「日本はいかに潜在成長性（ポテンシャリティー）が高い中国と付き合っていくか？」

元三菱商事株式会社常務執行役員　松井俊一氏

中国における3つのポテンシャリティーと国内市場の動向、成長分野、チャイナリスクについて披露された。政治面のポテンシャリティーは1党体制で即断、即決、実行される点がユニークで第二次習近平政権が盤石な体制で改革が進められるだろう。また、チャイナセブンと称される中央常務委員の改選が控えており党内規の年齢制限により5名程の交代が見込まれ後任候補者選びに世界中が注目している。経済面でのポテンシャリティーでは巨大市場の魅力があり年6.7%の経済成長率となっている。フィンテック・モバイル・共有経済と先端分野での成長が著しく、消費財・小売・流通、医療、都市化関連の3分野において成長が今後も見込まれている。国内では高齢者もスマートフォンを持ち、モバイルでの決済が進んでおり日本国内でも始まったデビットカード決済が主流でクレジットカードよりも利用が高い状況だ。ウィチャットと呼ばれるチャットが持ち入られ名刺を持つ国民は少ない。また、カーシェアリングやバイクシェアも進んでおり共有意識が高いところが日本よりも進んでいるところだ。GDPの推移では2016－2020年の成長目標は6.5%以上と以前に比べて経済成長率は緩やかではあるが、1年にASEAN主要国がひとつ生まれる規模の成長率は目を見張るものだ。チャイナリスクとして、格差、腐敗・不正、環境問題が国民の3大不満だ。マクロ経済の3大リスクとして債務残高、不動産バブル、資本流出が挙げられている。日本人との顕著な違いとして中国人は多民族存在の歴史・文化を持つ国の特徴から多様性があり、海外移住や起業精神が高く試行錯誤しながら大胆に、且つ柔軟性をもった方々が多いように見受けられる。食の安全には関心があり、GAP等で管理された日本の品質の高い安心安全な農産物を売りこむチャンスがあろう。

インドの農業及び肥料事情の現状と展望　元三井物産株式会社常務執行役員　鈴木徹氏

インドは29州7自治区で80%ヒンズー教徒による構成。カースト制度による身分差別がいまだに続く。年間3千万人が出生し、1千万人が亡くなる比率で人口が推移しており近いうちに中国を抜いて世界第1位となろう。インドは現在7.4%と高い成長率となっている反面、公害規制が甘い。現在、日本とインドは友好関係が続いており、現モディ政権は西寄りの政策を進めており、大きな混乱はなくうまく政権が取れていると見て良い。農業分野においては人口の半分が農民。手厚い補助金により保護されているものの、農家に直接補助金が渡るのではなく中間流通業者に補助金が行くシステムのため不正が横行しているようだ。農産物は安価で農家の手取りが少なく年間数万人が自殺していると

（次ページへ続く）

（前ページより続く）
言われている。因みに、肥料の代表である尿素は価格の半分が補助金で賄われている。80年代のインドは渡航の度に体調を崩していたが現在ではミネラルウォーターのボトルが安心して飲めるようになり食生活と文化の向上が見られる。しかしながらインドでは農産物が市場に届くまで半分が腐るという。インドが更なる発展を遂げるためにはコールドチェーンの発達とロジステックの整備が成長の鍵と見られる。インドに我々が貢献出来る可能性があることとして、安心安全な農産物が出来る様、現地で生産する手助けが出来るのではないかと期待したい。外に出向いてチャレンジしていくことが大切だと考える。

再び注目される養蚕 ～品質勝負のMade in japan

接頭語と敬称までつけて呼ばれる蚕（かいこ）って、そんなに偉いの・・・？そうなんです！「お蚕様」は偉人ならぬ偉虫なのです。何と言っても紀元前200年頃に中国と欧州を結ぶ全長7,000kmにもおよぶ交易路である「シルクロード」を作ってしまった方なのです。日本に養蚕技術が伝わったのは、シルクロードの発展と時を同じくして紀元前200年頃と言われています。後に蚕糸業は日本を支える一大産業となり1872年には群馬県の富岡に官営の富岡製糸場が建設され、ここで多くの技術者が育ち各地の製糸技術の向上に貢献しました。

繭は一本の糸でできていて、蚕はセリシンと呼ばれるタンパク質の糊状物質とともに糸を吐き出し繭を作ります。接着剤の役割をしているセリシンをお湯などで適度に溶かすことで１つの繭から1,000～1,500メートルの長さの糸が取り出せます。この糸を強度を増すために何十本か束ねて巻きとりよったものが生糸（絹糸）となります。製糸業の発展に伴い養蚕農家も全国に広がり、最盛期の1930年代には、農家の40％が養蚕を行っていたとされています。明治時代から昭和初期にかけて生糸は日本の輸出額の40～70％を占めていて、1900年頃には中国を抜いて世界一の生糸輸出国になりました。最大の輸出先は米国でしたが、世界恐慌をきっかけに輸出量は減少し、1940年以降はナイロンなどの化学繊維の登場により生産量はさらに減少しました。戦後の復興期を経て昭和30～40年には再び増産となりましたが、化学繊維の著しい発展により養蚕業は急速に減少してしまいました。かつては世界一を誇った繭生産量は、現在では最盛期の1%以下（約150トン）になってしまったそうです。

そんな最中、求人広告会社を営む「株式会社あつまるホールディングス」（熊本県熊本市）が養蚕事業に新規参入し注目を浴びています。新規参入にあたり新会社「株式会社あつまる山鹿シルク」（本社：熊本市）を設立し、養蚕施設としては国内最大の延べ床面積4,100㎡の平屋建て工場（熊本県山鹿市）を総工費23億円かけて今年4月に完成させました。最大の特徴は人口飼料と密閉された無菌のクリーンルームで、自前の農場25haを確保し、ここで生産した桑の葉から作った人工飼料を食べさせることで、年間を通じて安定的に養蚕ができるそうです。国内最大の産地である群馬県の生産量に匹敵する年間約50トンの繭の出荷を目指し、5年後には年間100トンの生産目標を掲げています。将来的には服飾向けの生糸だけではなく、化粧品や医薬品などに利用可能な製品にする計画です。桑園は標高600メートルに位置し、眼下には山鹿市街地や遠くには有明海が望める絶景スポットでもあり、まさに天空に広がる巨大桑園です。もともとは牧草地として造成されたものですが、数年間の耕作以降、平成26年までの二十数年間に亘り耕作放棄地となっていました。その荒れた耕作放棄地は平地から離れていることで、農薬の影響を非常に強く受ける養蚕業において蚕に優しいオーガニックな桑を育てるのに最適な土地でもありました。そこに着目し耕作放棄地を再生し、優良農地として蘇らせたのです。品質重視のJapanese Silkが世界の評価を得られることを期待したいものです。（福岡支店）

10/11～13、幕張メッセで開催される国際農業資材EXPO（アグリテック）に今年も出展します。ご来場の際は是非お立ち寄りください。http://www.agritechjapan.jp/tokyo/
編集事務局：南部、助川
電話：03-5275-5511/E-mail： macjournal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp